宿り木　　P57　R02,2,3　　佐橋　稔雄

愛知県の豊川へ来てから、桜の木に宿っている「宿り木」を始めて見た。桜の木は、高さ五メートルくらいであろう。その宿り木は、桜の枝先から一メートルくらいの所に、長さ数センチの青い葉を密集して付けている。その範囲は直径約五十センチの玉状であり、冬の桜は葉を落しており、宿り木の姿はよく目立つ。

一年ほど前に、市の職員が桜の木の調査をしている所に出会った。その時、彼は

「宿り木には困っている、枝を切るにも手が届かない。放っておくと桜の木が枯れてしまう」といった。桜の木は、佐奈川の土手に植えられており、土手の幅は一、二メートルしかない。大きな車は入らない。十本の桜の木につき、一個の宿り木があるようだ。「宿り木は桜の木のお陰（かげ）で生きている」

こんな宿り木がどうして出来たのか。市の職員は、風が吹いて種を運んだ、と言った。土手を歩く度に、その言葉がずっと気になった。桜の細い枝の先の窪みへ、種はどうやって到着したのか。その後辞書で調べたら、鳥が運んだと書いてある。鳥が糞を枝に植え付け、その中に種が入っていた。これもあやしい。二年前まで、愛知県の江南市に住んでいた。その時は濃尾平野の東側を流れる五条川の土手を歩いていた。その三十キロメートルに渡る土手に、四千本の桜が植えてあった。そこを十年以上も歩いてきたが、宿り木を見ることはなかった。

そんな時、Ｅテレが、百分で名著「貞観政要」を放映した。この書物は、唐の第二代の皇帝の貞観年間を書いたものであり、政治の要を表している。中身は、君主こそ寄生階級である、と言っている。人民が生産者であり、人民が倒れれば君主も倒れる。命令をしている君主は「人民のお陰で生きている」という。

この名著を徳川家康も読んでいたという。あるＴＶドラマに、将軍が「家臣を大切にせよ」という場面が何度も出ていた。将軍が本当に言った言葉か、ドラマの創作なのかは知らないが、徳川が二百五十年も続いたのは、「桜の木のお陰の思想」を実行していた結果に違いない。

別の政治家に田中角栄がいた。彼は「輿に乗る人、担ぐ人、そのわらじを作る人」と言った。上に居る人ほど多くの人に担がれている人であり、お陰を受けている人である。角栄の国会議員の派閥の人数は、当時百四十人もあった。それだけ「家臣のお陰を大切にしてきた」のであろう。

私は八十歳を越えた高齢者であり、血圧が高い。月に一回、病院へいって

体調を見てもらい、降圧薬を頂いている。診察料と薬代を合せて、千円くらいである。これは一割負担であり、約一万円を若い人が負担している。それに年金も、若い人の負担である。「若い方のお陰で生きている」ことに、感謝しなければいけない。

大乗仏教では、お陰をご縁という。宿り木は、桜の木のお陰で、ご縁で生きている。時間を遡（さかのぼ）るお陰も又ご縁である。人は両親のご縁でこの世に生きている。その証拠が、人の体を作っている細胞の中のＤＮＡの中に残っている。そこに両親の痕跡がある。その両親は、もう一つ上の世代の両親の痕跡を持っている。こうして一世代毎に、二人、四人、八人、とご縁の数は増えていく。

現代の人は、十万年くらい前の人と殆んど変らないという。百万年くらい前になると、前かがみで少し猿に似ていることが化石から分る。数億年前になると、地球は海の中の単細胞生物のみの世界となる。海の塩分濃度と人の血液の塩分濃度は似ている。陸上の動物は、昔海の中から出てきたのであろう。ご縁の歴史は人、猿、単細胞生物、へと続く。

地球と月と火星は、同じような岩石からできている事が観測されている。いづれも起原は同じであろう。太陽の周りの塵が集ったものらしい。太陽の光と宇宙の彼方の星の光を測定し分析して見ると分る。太陽も宇宙の星も同じものから出来ている。私達は数億年前の地球のご縁、地球ができる前の太陽系のご縁、宇宙の果（は）ての星のご縁で生きている。

西洋文化の科学のご縁で、過去のご縁の歴史が分ってきたように見える。しかし東洋文化の中に、華厳経という大乗仏教の経典がある。

経典に「小は大である。小さな世界がそのまま大きな世界である。一塵の中に全て存在する世界が含まれている。一即多、多即一」とある。　一は多くのご縁から成り立っているので、一と多の中身は同じである。華厳経は、二千年前の「インド人のご縁の思想を表し、人生観、宇宙観を表す思想」である。ご縁の思想は、それより更に五百年も前の釈迦の思想から出ている。